

どうしようもない...
明日、朝早いのに

指が止まらない...♡

びく

びく

びく

ん

ん

びく

ん

ん

ん

ん



アイドルになる前は「その行為」をしたいという思う日はほとんどありませんでした。でもどういうわけか、最近は寝る前に毎日「その行為」をしちゃいます。

昨夜も、「昨日も、くたくたで眠かったけれどやめられませんでした。こんなこと恥ずかしくて誰にも相談できない……。

その日の授業は特に眠かったんです。

眠気を覚ますためにもノートに何でも書こうと思って、筆箱を開けたときです。見慣れないシャープペンシルが目に入りました。

それはこの前事務所で借りた後、返せなかったプロデューサーさんのシャープペンシルでした。



私はそのシャープペンシルが誰でもない
プロデューサーさんのものだということを
思い浮かべるとすごく興奮してしまいました。
古くなって色がところどころはげている
シャープペンシル。

プロデューサーさんの大きな手がこの
シャープペンシルを握っていたのだと思うと、
頭の中がぼわっとなり、足の間が熱くなりました。
そう、まるでタペのようだ……。

気がつくと私はスカート裾を反らしてシャープペンシルであそこを触りだしてしまいました。

ダメ……こんなところ……誰かが見たら……♡



危ない、このままじゃ私……。

頭ではだめだと思いましたが、

とても手を止めることができませんでした。

なぜか毎日ベッドの上で密かにするよりも、

ずっと気持ち良いんです。

こんなに周りにみんながいるのに

こんなことをするなんて、アイドルになる前は

想像もできなかつたことです。

もう少し、あと少し……。



「櫻木さん……!」

「は、はい!」

「授業中寝ちやダメです。」

先生の声で私は我に返りました。

「ごめんなさい……。」

その時になってやっと私は止まる事ができました。

危うく最後までイクところだったという安心感、

先生にバレたのではなかったという安堵感が私の頭を冷やしてくれました。

でも私の身体はまだ火照っていました。



「バイバイ！」

「またね。」

放課後、灯織ちゃんとめぐるちゃんの顔を見ると、いつも以上に罪悪感を感じました。

「アイドルとプロデューサーが付き合うなんてありえない。」

灯織ちゃんがイルミネを結成してすぐのときに言った言葉です。でも今は私も、灯織ちゃんも、めぐるちゃんもプロデューサーさんを好きだと思えます。

でも灯織ちゃんのその言葉のせいで、私たちは誰もその話題に触れないようにしていることにも気がついていました。

誰か一人でもプロデューサーさんと今より「もう少し」近くなっただけなら、
こうやってみんなと帰るのも、お喋りするのでも、
そしてイルミネーションスタースターの活動もできなくなるかもしれないからです。

……。

プロデューサーさんはもちろん私の大切な人ですが、イルミネの二人も同じくらい大切です。
私はプロデューサーさんにシャープペンシルを返して、気を引き締めることになりました。

もう「その行為」はしない事にしよう。
私は一人で事務室に向かいました。

本
ほしい本と出会え
民明書局



でも私は……



…私との約束を守りませんでした。

ぐわんぐわん

ぐわんぐわん

プロデューサー

女

ぐわんぐわん

ぐわんぐわん

ぐわんぐわん

プロデューサーさんの机は夜遅くまで働いていたのか、
プロデューサーさんの臭いが強く漂っていました。



私はいつの間にか、プロデューサーさんの
机の角にあそこを当ててしまいました。
どうしようもなく出てくる体液や声、
誰かがここにいたら、もう事務所にいることが
できないかも知りません。

授業中とは比べものにならない興奮が私の体を
支配していました。

事務所に入るといつも目にする毎日
プロデューサーさんが座って仕事をする机。
そんな日常的な風景の中で私は汚いことをしていました。





これいい...♡

あぁ...いい...♡

ピクピク♡

ピク♡

ん...いい...♡

あ...あ...あ...♡

ト...ト...♡

ト...ト...♡

私はとうとう事務所でイッてしまいました。
散らかった机、落ちた物、そして私の体から出た液体で、
机も床もぐちゃぐちゃになっていました。

まるで私の気持ちのようだ……。

でも、ぼうつとしている時間はありませんでした。早く元通りに整理しないと……。



そのとき、足元に落ちてひどく汚れた
プロデューサーさんのジャケットが私の目に入っただけでした。

